＜研究ノート＞

梁啓超の評価問題について

陳　　立　新

はじめに

梁啓超の評価問題は，梁啓超研究をするために必ず触れる問題である。これもまた広範囲にわたって，時代変化と共にさまざまな立場や方法論によって議論されており，かなり煩雑化とされてきた。

しかし，彼の著作全集の出版の流れから見れば，梁啓超の業績そのものは，量的に徐々に拡充していることも事実である。その出版の流れは，彼に対する評価の高さをしめすとも言える。1902年に彼の教え子何擊一は上海の廣智書局で初の『飲氷室文集』[1]を出版して以来，梁の生前において既に24種類の著作集が繰り返して出版されていた。[2]それが死後75年の今日になってもまだ続いている。[3]当然，大陸側において，新中国が成立してから1979年までの間は，梁啓超の著作或いは梁啓超研究に関連する出版が途切れた時期であったが，文革の10年間を除いて，梁に関する評価研究はずっと続いてきた。その評価問題に関する研究の変遷もまた，大陸側の歴史の一側面として反映されている。一方，海外においては，独自の展開もあれば，大陸側と呼応する傾向も見られる。

本稿では，これまでの梁啓超に対する評価の歴史を辿り，代表的な論者の観点を整理しながら，その評価基準の欠落を検討したい。

一，文革以前

新中国が誕生した後，梁啓超の評価問題をいち早く扱ったのは，胡濱の「戊戌政変至辛亥革命期間的梁啓超」[4]という一文であった。この中で胡氏は，梁の戊戌政変までの啓蒙活動の功績に関しては，認めるべきだが，それ以降，梁の堅持してきた改良主義路線がついに民主主義革命に反対する凶悪な敵になってしまったのであると指摘する。最後の結論に，梁が立憲運動に参与し，鉄道利権保護運動をリードしたことに対して，積極的役割を果たしたと肯定する。

ほぼ同期に，王介平の「論改良主義者梁啓超―梁啓超政治思想的批判」[5]が『中国近代思

想家研究論文選』に発表される。王氏は，中国近代社会歴史の発展及び梁啓超の政治思想の変遷の特徴に基づいて，四つの段階に分けて梁の政治思想を徹底的に批判する。

第一段階　康有為に師事～戊戌政変（1890～1898）

第二段階　日本亡命～革命派との論戦失敗（1898～1905）

第三段階　論戦失敗～辛亥革命（1906～1911）

第四段階　辛亥革命～死去（1912～1929）

明らかに，王氏の分け方は革命史観に基づいたものである。

1958年７月に，馮友蘭の「梁啓超底思想」[6]が発表される。馮氏は，1905年以降に梁が企てた第二次改良主義運動に対しては，革命運動に抵抗する反動だと批判した。しかし個々の面では数多くの反論をしながらも，総体的には，梁の新民説の中にある，公徳，国家思想，進取冒険の精神，権利思想，生利と分利といったものに，進歩的な意義を認めざるを得なかったようだ。李澤厚の『康有為譚嗣同思想研究』[7]の中にも梁啓超についてやや評価する立場があった。しかし，この二人の観点に対しては反対意見が続々と発表された。

1960年に胡繩武・金沖及の「関於梁啓超的評価問題」[8]と題された一文が発表された。これは「弁証唯物主義，歴史唯物主義，階級闘争」の観点に立って，馮氏と李氏の結論に反撃を加えたもので，梁啓超を全般的に否定する姿勢を示したのである。

ここで論争の焦点となったのは，1898年の政変失敗後にした，孫文の革命派との合作についての真偽という問題，及び「新民説」が進歩的な意義を持っているか否かということについてであった。また，「五四運動」前後において梁が「新文化運動の一員」であったか否かについても，議論がなされている。結論としては，梁啓超は巧妙に革命民主主義と社会主義の理論に賛同しながら，最終的には保守的改良主義の陣営に戻り，社会主義思想の伝播を阻止した反動文人であると断言するものであった。

陳匡時もまた「梁啓超の評価問題に関する簡単な紹介」[9]との一文がそれに付随する。その冒頭に，「戊戌変法維新の失敗によって，改良主義の破産が宣告される。中国社会も革命機運が高まるに伴い，急激に推進される一方である。しかし，地主と資産階級の利益を代表する梁啓超は改良主義の堡塁に固守しつづけ，堕落と反動に転向し，長期的かつ猛烈に資産階級がリードした『旧民主主義革命（反清排満）』と工人階級（無産階級）及びその政党中国共産党がリードした『新民主主義革命（反帝反封建）』に反対する。」とあげる。陳匡時はさらに，新中国の成立するまで，数多くの梁の言論著作が出版され，彼の思想が社会の各方面において一定の影響を認めながら，梁の改良主義思想体系がこのような言論著作に絶えず広く流布していることは，当時の革命闘争において民族解放運動を阻害すると指摘し，「目前の政治及び思想の領域において社会主義革命が更に深く展開すると同時に，梁啓超の政治思想を分析して批判することは，まだ現実的意義がある」と提言する。

陳匡時は新中国成立以前の梁啓超研究の論調を以下のようにまとめる。

第一に，梁の後期における反動的改良主義政治活動（事実上北洋軍閥の爪牙）を無罪にするどころか，逆に功績（護国戦争）として謳うものである。

第二に，一点（新文体）を誇張して，その他を論及せず，梁の政治面目を暈すものである。

第三に，梁啓超の学術分野における活動ばかりに言及し，彼の政治活動と政治思想については回避した。学術と政治を分断して論及することは，梁を正確に評価することが出来ないだろう。

第四に，梁の政治思想の啓蒙活動一点だけを一面的に強調することは，当時の時代背景と政治的実践から離れて彼の啓蒙活動を評価するに等しい。

陳匡時は，この整理にあたって，建国してから10年，史学界において梁啓超という人物及び彼の政治思想に対する評価と批判は，既によいスタートを切り開いた。まだ全面的かつ深く掘り下げていないけれども，梁啓超という歴史人物に対する研究は漸次に展開していくだろう，という見解を示している。

とはいえ，史学界の重鎮である上海の歴史学者陳旭麓が梁の改良主義に対してやや評価的である。彼は，1961年７月に『光明日報』と『文匯報』に「論梁啓超的思想」と題して連載する。当時の「戊戌政変後の梁啓超には，既に改良主義思想の痕跡さえ見当らない。あるのはまったく反動的な考えばかりである」という流行的認識に対して，陳旭麓氏は異議を唱え，梁の思想変化の表象が多いけれども，変わらないのは彼の改良主義思想体系だと主張する。しかし，当時の思潮と認識に制限され，思い込みの言葉が多く，弁証的思惟様式もあまり運用されなく，梁啓超の文化思想における貢献に対してもあるべき評価を与えなかったわけであるとの反省が彼の文集に書かれている。[10]

文革以前の歴史人物に対する評価の基準は，革命史観論と階級闘争決定論に基づいたものであった。馮友蘭，李澤厚，陳旭麓らは，梁の改良主義思想においての進歩的な意義を持っている部分を見出して肯定の姿勢を示したが，主流派の胡縄武，金沖及，陳匡時らはこれらを余りにも認めようとしなかった。したがって，この時期において，梁啓超はほぼ反動的人物として評価されてきたのである。

二，文革以降

文革が終息してから，歴史人物に対する再評価の機運が徐々に高まる。かつて60年代に胡縄武・金沖及両氏に厳しく糾弾された李澤厚は，彼の『中国近代思想史論』に収録した「梁啓超王国維簡論」[11]において，これまで歴史人物の評価する基準に関して異議を唱える。

「新中国が成立して以来，梁啓超に対する評議が多く，その中で基本的な論調はほぼ一致しており，みなが口を揃えて梁を否定的な歴史人物として扱っている点である。その理由は明白かつ簡単すぎる。梁啓超は辛亥革命時期における著名な“保皇党”の頭目の一人であり，

辛亥以降もまたずっと反動的な立場にいたからだ。しかし，唯心主義を批判することと歴史人物を科学的に評価することは，同じ次元ではない。したがって，歴史人物を評価する場合，当事者の唯心主義或いは政治思想に対して批判するばかりに留まらず，その人の歴史における貢献が引き起こした客観的な作用と影響に基づいて考量すべきであり，史実と符合した的確な地位を与えるべきではないだろうか。このような角度と基準に着眼すれば，梁啓超は肯定的な人物であるべきだろう。」[12]

李澤厚は更に，梁の中国近代史における作用と地位に関して，1898年から1903年にかけての五年間に基づいて判定すればよい，と主張する。日本の庇護を受けたこの五年間において，梁はある程度康有為の思想から遊離して，相対的かつ全面的に，当時として前衛的なブルジョアのイデオロギーを宣伝したわけである。[13]

1903年から1911年辛亥革命にかけて，梁啓超は一筋立憲運動に身を投じ，革命派と対立した時期であったが，革命史観から見れば，この時期において評価すべきものはまったくないのである。しかし，李華興・姜義華は「梁啓超与清末民権運動」[14]において，民権運動の視点から見れば，梁啓超の立憲運動が革命派の政治革命と一致しているものであり，ただ違う手段をとっただけではないかと指摘し，清朝末期における民権運動は実質的に革命派と立憲派との二大勢力に分けられる。清朝政府と封建君主専制がこの二大勢力によって覆されたのである。暴力革命が決定的な作用を果たしたが，立憲運動は群衆の教育と組織において，同盟的作用を果たしたことは抹殺できないだろう，と主張している。

胡嘯の「梁啓超後期思想的評価問題」[15]一文がこれまでの梁は新文化運動の敵であるという定説を真っ向から否定した。また，胡氏は，梁の社会主義は実質的に改良主義にあり，彼はマルクス主義と徹底抗戦したが，学術における貢献を認めるべきだ，と主張する。

1980年代以降，梁啓超の教え子であった蔡尚思の梁に対する評価がもっとも注目される。蔡氏は「対梁啓超的評価」[16]において，梁の積極面と消極面に分けて，簡潔かつ全面的に自分の先生についての評価を下した。1980年６月20日付の『人民日報』に載せた歴史学者湯志鈞の「関於戊戌変法的評価問題」との一文において，「維新派は民族の独立と中国資本主義の発展に巡る問題の解決を試みた時，最も実行に移す可能性のある改良主義の道を選択せざるを得なかった。」と改良主義を再評価する基調が定められた。同年11月に出版された孟祥才の『梁啓超伝』は，新中国成立して以来梁に対する研究の集大成だといえる。また，これは初めての梁に対する全面的な評価になるものである。しかし，戊戌時期，日本亡命初期，護国戦争及び晩年の学術研究を肯定的に評価した以外，彼は反動文人だという基調は一向に変わりがない。[17]残念ながら，孟祥才は「一錘子定更」で音を決めようとしたが，かえって「千錘子打鑼」の局面に迎えた。鄧小平の改革開放の路線を実行するにつれて，梁啓超の改良主義に対して徐々にプラス評価に転じてきたのである。孟氏の『梁啓超伝』が出された後，梁に対する評価が，勢い当たるべからず，一つの風潮となった。『梁啓超』，『梁啓超伝』或

いは『梁啓超伝記』などの似たような書物が14点以上にも数えられる。

90年代に入ってからは，プラス評価が一極集中に現れる。その中で董方奎が代表的な論者として注目される。梁が中国近代における精神的指導者という未曾有な表現を使われている故に，梁に対する評価が一段と高まる。[18]董氏は，梁の「過渡時代理論」が非常に優れた理論であると高く評価して，時代にマッチしたものであるという結論を導出した。

文革以降において，まずその階級闘争決定論は，国策が改革開放路線に転じることによって，その理論的基盤がほぼ崩れた。次に，革命史観論はまだ支配的地位にあったが，それがようやく市場経済の導入によって徐々に弱体化しつつ，代わりに梁の改良主義の価値観が蘇られたのである。特に，天安門事件と法輪功事件が国家安全を脅かすものであると判定され，梁の過渡期における「開明専制」論が認められたのである。

三，海外での梁啓超に対する評価

大陸側に対して，海外では上述の大陸の流れとは違う様相を呈している。アメリカの梁啓超研究を扱う理由は，主に新中国の成り行きの究明に重点を置いて，毛沢東思想の形成と梁啓超の啓蒙との内在的なつながりを解明するためであった。それが判明されたことによって，梁の中国近代史における人物像が再構築され，学界に関心を呼んだ。本誌前号[19]に述べたレベンソンの研究は画期的なものであった。しかし，1964年，台湾の張朋園の『梁啓超與清季革命』が出版されるきっかけに，蕭公權（1897～1981）は「梁啓超と中国近代思想の関係について，海外においてある者（レベンソンを指す）がすでに一冊の専門的著作を出しているが，著者が任公の立言の意図と精神を会得することができなかった。博引傍証して気ままに放言したけれども，雲を掴むような話で，気が利きすぎて間が抜けるような感じが免れない。」[20]とレベンソンの研究成果に対してあまり認めようとしなかった。

1971年に出版された『梁啓超と中国思想の転換（1890～1907）』（Liang Ch'i–ch'ao and Intellectual Transition in China1890–1907）は，張灝の60年代中期に完成したハーバード大学の博士学位論文である。一般に西側の衝撃（Western Impact）の思考方法とは逆に，張氏は「想像的参与」（Imaginative Participation）との研究方法を駆使して，1900年前後近代中国思想の転換におけるキー・パーソン梁啓超の果たした役割を信仰とした儒家思想の内部動力から出発して考察したのである。19世紀90年代の改良運動は実に真の思想運動であると指摘する。また，梁の思想変化を社会理想（Societal ideals）と人格理想（Personality ideal）との両方において考察を行った。社会理想において，まず，大同思想と決別して，国家をターミナル・コミュニティと承認すること。次に，国家の道徳目標を集団的な達成と原動力の増強との政治目標に転換すること。そして，人格理想においては，「経世致用」思想から国民思想に転換することに集約される。彼の国民思想は実質的に集団主義と進取の精神との合体

である。梁の新民説に描かれた国民の理想像が毛沢東時代の模範共産党員とは酷似していることは，梁の国民思想が中国共産主義価値観体系に重要な要素として受け継がれているのを意味している。[21]

1972年に，黄崇智（Philip C. Huang）の『梁啓超と近代中国の自由主義』（ワシントン大学の学位論文，Liang Ch'i-ch'ao and Modern Chinese Liberalism）は，梁啓超の研究を一段アップした。彼は，東京大学の市古宙三教授が提供した日本外交公文書を活用して，これまで梁啓超の思想発展段階において軽視された部分を精力的に取り組んだ。1898年から1903年にかけて，ことに梁のエッセイには革命の情熱が満ち溢れていた。これもまた梁の絶大な人気と影響力と重なった時期であった。二十世紀の中国人の思想において多くの重要な課題が梁によって提示されていた。また，これらはのちの自由主義者とマルクス主義者との区分を超越した仮説でもあった。彼の名文を読んで鼓舞された青年たちのなかで，胡適（1891～1962），顧頡剛（1893～1980），陳独秀（1880～1942），毛沢東（1893～1976）などの姿があり，彼の思想が辛亥革命，五四運動に広く及んだ。欧文を読めない梁にとって，日本語は彼の読める唯一の外国語であった。日本に亡命して，彼の思想が一変した背後には，やはり土着の日本人の考えから影響を受けたからだ。[22]

90年代に入って，一人の在米中国人学者 Xiaobing Tang（唐小兵）の梁啓超研究が注目される。彼の著作「グローバル・スペースと国家主義者論説の現代性―梁啓超の歴史思想」[23]において主な観点として，次に要約される。

世界地図が出現された瞬間に，人間の征服欲の内実が変わり，歴史や文化の解釈もそれに伴って一変したのだ。かくして近代主義（Modernism）の産声をようやく上げたのだ。梁の日本亡命後に生まれた国家主義歴史観が当時日本で流行した人種論や地政学に強い影響を受けた。彼の政治小説『新中国未来記』には，フランスの共和主義とドイツの自由主義との間に議論を展開する一方，革命後の政治及び文化の再建問題をも紹介される。しかし，欧州大戦後，梁は再び文化主義を主唱したのは何故だろう。それは，人類学，文化史における中国文明の位置付けをより高い次元に再認識されたからだ。中国文明に賦与された新たな現代性或いは現代主義が時代の進化とともに要請されているという意味であろう。いわばポスト・モダニズムである。梁は「文化的政治」を再定義したうえ，さらにその空間性を広げ，「文化的歴史」と融合させた大同世界に回帰した。そういう意味で，梁は現代と歴史との対話に悩まされている現代主義者にモダンとポスト・モダンとの調和の必要性及び可能性を提示したのである。

台湾での梁啓超研究は絶え間なく，ずっと行われてきた。それは国民党の政権にとって，必ずしも好都合ではないが，当時梁の二週間台湾訪問[24]中，台湾での日本植民地政策の優位性を実感して，「日本臣民として不服唱えることなく誠心誠意国家のために忠実にならんことを望む」といった内容の談話が広く台湾住民に知られているため，これからも梁の思想に

関心を払い続けるだろう。

前述した張朋園の著書には，主に革命史観を機軸にして五つの結論に至る。①梁啓超はかつて康有為からかなり影響を受けていたが，彼の思想は康有為の範囲に留まらない。②清朝が滅亡するまで，梁啓超は君主立憲運動に力を注いだとはいえ，民権革命の情けを捨てられない。③梁は革命運動とはしばらくの間，合作を構えたが，最終的には決別となった。しかし，彼の言論が直接的或いは間接的に革命思想の発展に役立っている。④彼は『新民叢報』に発表した『民報』の論調を覆す文章が，革命派の主張の更なる明晰さと緻密さに役立っている。⑤彼は辛亥革命とは直接的な関係はないが，彼の革命を助長した役割から考えれば，一人の「革命先覚者」であるともいえよう。これらの主張は，梁啓超の汚点とみなした従来の評価を一変して，積極的に肯定的な評価を下したのである。

90年代に入って，台湾でもこれまでの革命史観を見直す動きが出てきた。台湾中央研究院の若手研究者黄克武の『一個被放棄的選擇：梁啓超調適思想之研究』（台北中央研究院近代史研究所専刊「70」1994年）は，広く大陸側の学界に紹介されている。黄氏は梁啓超思想の脈絡に着目し，中国近代史において，知識人や政治家が常に「転化」（革新，革命）と「調適」（調和，改良）との選択肢に惑わされると指摘し，最後にやはり調和主義が国を救う暴力主義に圧倒され（救亡圧倒調適），梁の主唱した調和主義の選択肢がついに歴史に埋没されたのだが，いま，ようやくその価値を見直す時期が到来したではないかという風に判断されている。

一方，梁の亡命先である日本では，彼に対する評価に関して，戦前にさかのぼる。実藤恵秀は，梁の「文化的影響力は孫文の上に出るとも，これより下るものではない。『中学為体西学為用』は，いつのまにか『不中不西即中即西』に置き換えられていたのである。厳復の西洋思想書翻訳，林紓の西洋文学翻訳は，この線に沿うものと見るべきである」と評価している。[25]戦後に入って，まず「清末における在日康梁派の政治動静」と題した永井算巳氏の研究を特筆しなければならない。永井氏は1959年７月に「梁啓超：中国近代史研究の手引」（『大安』第５巻第７号）を発表して以来，梁啓超研究に関する論文は十篇以上数える。[26]その中に，「梁啓超と辛亥革命」との一文が『近代アジア教育史研究』（岩崎学術出版社1975年３月）に収録されているのは，いささか奇妙な感じがする。これまで，辛亥革命の主役は孫文などの革命派とされてきたが，梁啓超はずっと対象外であった。しかし，当時の日本外交公文書を見れば，梁啓超はしばしば革命家として扱われていたことは，その実情を物語っている。

次に，1963年７月に出版された『中国の思想家』において，梁啓超も思想家として評価されている。執筆担当の佐藤震二は，梁が「人間や社会に対して如何なる意欲と期待をもち，如何なる視覚から自己の思想を設定していたかという点に問題を限定し」，若干の考察を行った。佐藤氏は上述した馮友蘭と陳旭麓の論文を参考にして，「最近の中共学界において，

梁啓超の思想を如何に評価しているかというに，戊戌新政までの彼の思想を，資産階級的改良主義の立場をとる進歩的思想とし，一八九八年以後の彼の思想を，資産階級革命を妨げる反動的思想とする基本的傾向が極めて強く出ている」と概括し，「このような傾向は，中共の学界が思想を階級闘争的革命運動史の視点からのみ見ることに由来するのである」と指摘する。また，佐藤氏は，そのような見解の反面において，「思想史的評価を一定の政治集団の側からする革命史的評価のなかに埋没してしまう弊害，個々の思想家たちを類型化・公式化した基本性格において考えようとする弊害などを齎したことも見落とせない」[27]と言う点に着眼して，梁啓超の思想を五つの時期に分けている。前記の王介平の四段階にほぼ沿うものであるが，その第四段階を欧州大戦終結までとして，残りは第五期と規定する。しかし，この文において，佐藤氏の第三・四・五期に関する論評が見られない。

日本での梁啓超研究をようやく精力的に行ったのは，京都大学狭間直樹教授の率いた研究班が，1993年４月から1997年３月までの四年間をかけての共同研究であった。[28]それまで，中国側と同様に革命人物を中心に大々的に研究されてきたが，この共同研究を行ったきっかけに，その流れを転向させたのである。そういう意味で，この共同研究は破天荒なことであろう。しかし，この共同研究は基本的に梁啓超の明治日本からの摂取という議題設定の下で重点的に行われたものであって，梁啓超はたかが伝搬作業をやっただけだというような印象が読者に与えている。したがって，これは梁啓超に対する全面的に評価を下すものではないといえよう。日本での梁に対する全面評価はまだ時間を要するものだろう。[29]日本の戦後の中国「近代思想研究は，主に中国革命の源流としての，つまりアヘン戦争以来，植民地化に抵抗した近代中国の，その抵抗―変革―革命の道すじを追うことを課題とした。」[30]明らかに，これは中国学界とほぼ同調した形でやってきたのである。

梁啓超の西洋近代思想の受容が康有為の萬木草堂での受講より始まり，『中外紀聞』の編集に携わったときに，洋書との接触の機会が増え，その蓄積がのちの『西学書目表』（1896年10月上海時務報館石印，298種の洋書を収録）の出版につながった。ただし，そのとき梁の西洋学に対する認識がまだ「中体西用」との枠組みの中で器物重視に留まっていた。日本に亡命してから四年目，『新民叢報』第九，十一号に発表した『東籍月旦』（1902年６月，日本語書籍72種167冊を収録）は『西学書目表』の姉妹篇と見てよかろう。やがて『西学書目表』に取り入れなかった「教」の部分を『東籍月旦』で充当できたのである。西洋の哲学，学術思想の内実を日本語書籍の大量渉猟によって理解できたといえよう。梁の西洋の「体」に対する認識を深めたのは，日本に亡命してからである。とはいえ，梁の日本亡命の経験が中国の西洋化実行の緊迫性を彼自身に提示したと同時に，よかれあしかれ伝統文化を完全に排除してはいけないと気付かせた。[31]

むすび

梁啓超の思想について，次の三つの特徴に集約できるというようなステレオタイプがすでに中国学界で定着している。第一に，新事物に対して素早く受け入れること。学問において，八股から考拠学，それから今文経学へと二転三転する。第二に，上手に鼓動すること。文章の表現に魔力が付き纏う。筆鋒に常に情感を帯びる。第三に，理論の基礎が比較的に浅いこと。

第一点によって，彼は湖南に行ったあと，黄遵憲，譚嗣同の観点を吸収し，民権思想を鼓吹する。同時に，反満の情緒を流露し，地方自治に傾く。これらはすべて康有為の思想範囲を超えたものであろう。日本に亡命してから，大同思想をやめ，革命や破壊主義を唱道し，さらに国家主義に転向する。第二点によって，彼はどこへ行っても言論界に波濤が湧き上がって，渦巻きが激動し，新しい思潮となる。変法運動，勤王運動，立憲運動，文化運動など次から次へと常に輿論をリードする。第三点によって，彼の思想に「流質多変」の特徴が現れる。果たして，これで梁啓超の思想遍歴を片付けられるのかといまだに疑問を感じ，さらに深く掘り下げて検討する余地があると思う。つまり，人格論と人物の歴史作用と切り離して議論する必要がある。

梁の「多変」気質に形成に関しては，永井算巳氏のご指摘であるように，終始「対外をてことして対内へ」[32]という発想が底流にあったからだ。その対外をてことしたものの中に，日本は重要な位置を占めている。梁の中国近代史における作用と地位に関して，1898年から1903年にかけての五年間に基づいて判定すればよいという李澤厚の論点に注目に値しよう。日本は梁啓超のジャーナリズム活動の舞台を提供することによって，中国の近代化の方向性を示した。それゆえ，梁のジャーナリストとしての評価も検討する余地があるのではないだろうか。

もう一つ，『清議報』第二十五冊（1899年７月21日発行）より『飲氷室自由書』（署名任公）を連載し始め，「飲氷」という二文字が梁の終生に付き纏うことに注目しよう。それが『新民叢報』（創刊号，1902年旧暦正月初日）を発行する際にあたって，「中国之新民」（『新民説』の署名）と「飲氷子」（『飲氷室自由書』の署名）のペンネームを並行して使い始めたが,1906年に入って，梁は単独で『民報』と応戦した文章は，すべて「飲氷」というペンネームを使っていた。1924年，晩年に入った梁は天津イタリア租界に造った二階建ての書斎を「飲氷室」と命名した。では，何故梁は「飲氷」を好んで使っていたのか。また自分の文集もこの二文字を題にしたのは一体どういうわけであるのか。

「飲氷」の語源は『荘子・人間世』にある一節「今吾朝受命而夕飲氷，我其内熱與？吾未至乎事之情，而既有陰陽之患矣；事若不成，必有人道之患者。」から来ている。中国の衰退

の原因が「陰虚陽旺」にある。その処方箋を「積陰復陽」にしなければならない。「飲氷」はまさに「積陰復陽」を意味している。つまり，この二文字は中国を救う処方箋である。その「氷」が時には「明治日本の気風や欧米の近代文明」の形で吸収され，時には康有為の大同思想や中国の伝統文化として表れてくる。梁の文章には東洋医学の弁証理論によるものは枚挙にいとまがない。これについてまた別の機会で論述したい。本誌前号にも言及したように，梁啓超は道家の陰陽五行説を断固として排斥したが，実に彼の言論に老荘文化が充満していると言ってよい。それが無ければ，彼の言葉の魔力が発生し得ないだろう。彼自身さえ気付かなく，無意識に吐露したのである。[33]したがって，「飲氷」についての理解を抜きにして梁啓超の評価を下すことは彼の人間像を歪んでしまう恐れがある。

注――――――――

1　同書は二年後の1904年（明治37年）５月に日本帝国印刷会社がその翻刻版『飲氷室文集類編』上下二巻（下河邊五郎編，国会図書館収蔵）を出版した。

2　李国俊　編『梁啓超著述系年』復旦大学出版社1986年１月　15～16頁。

3　1937年（死後８年）まで，16種類が出版されている。それ以来，香港では1974年に『飲氷室全集』を出版し，台湾では17種類にも及ぶ。大陸側もすでに『飲氷室合集（１－12)』(1989年)『梁啓超全集』(1999年)『飲氷室文集点校』(2001年）を出版している。天津古籍出版社も『梁啓超全集』を出版する予定（２年後)。いずれも一千万字を超えるものである。

4　『新建設』(光明日報社）1957年４月号（総第103期）36～41頁。

5　中国人民大学中国歴史教研室『中国近代思想家研究論文選』　北京　三聯書店　1957年４月　63～98頁。

6　馮友蘭　著『中国近代思想史論文集』上海人民出版社1958年７月　128～141頁。

7　李澤厚　著『康有為譚嗣同思想研究』上海人民出版社　1958年８月。

8『学術月刊』1960年第２期（総第38期）40～52頁。

9　陳匡時「関於対梁啓超的評価問題簡介」同上51～55頁。

10　陳旭麓『陳旭麓学術文存』　上海人民出版社　1990年12月　849頁。

11　李澤厚『中国近代思想史論』　人民出版社　1979年７月　421～438頁。

12　李澤厚　前掲書　422頁。

13　李澤厚　前掲書　423～424頁。

14　復旦学報（社会科学版）1979年第５期　50～56頁。

15　復旦学報（社会科学版）1979年第５期　57～63頁。

16　『中国近代史』中国人民大学書報資料社　復印報刊資料　1983年第10期　113頁。1983年10月12日付『羊城晩報』第二面より転載。

17　孟祥才『梁啓超伝』北京出版社　1980年11月。

18　董方奎「梁啓超：近代中国的精神之父」　『華中師範大学学報（人文社会科学版）1998年９月　第37巻第５期　14～20頁。董氏は梁啓超研究においていくつか重大な発表を世に送った。『梁啓超与護国戦争―記念護国戦争七十周年―』　董方奎　著　重慶出版社　1986年８月。『梁啓超与立憲政治―清末政体変革与国情之論争―』　董方奎　著　華中師範大学出版社（武昌）1991年７

月。『吭世奇才梁啓超』　董方奎　著　武漢出版社　1997年10月。彼の観点はどっちかというと張朋園氏に近い。

19　田村紀雄・陳立新　研究ノート「梁啓超と在日期の文筆活動」『コミュニケーション科学』（第20号）143～156頁。

20　張朋園『梁啓超與清季革命』中央研究院近代史研究所　1964年５月　「蕭公權先生序」。

21　Hao Chang（張灝）：*Liang Ch'i-ch'ao and Intellectual Transition in China* Harvard University Press Cambridge, Massachusetts 1971. pp1～6, 296～307.

22　Philip C. Huang：*Liang Ch'i-ch'ao and Modern Chinese Liberalism*　宗青図書出版公司　中華民国68年10月初版　pp3～10.

23　Xiaobing Tang：*Global Space and the Nationalist Discourse of Modernity-The Historical Thinking of Liang Qichao*　Stanford University Press　Stanford, California 1996.

24　梁啓超，湯覚頓，梁令嫻（梁の長女），ヨタ福（下女）一行は1911年３月28日に台湾に到着し，4月11日に台湾から離れる。日本外交文書（整理番号450268）。

25　実藤恵秀　編『近代支那思想』光風館1942年６月　169頁に参照。

26　時間順に追っていくと，「清末における在日康梁派の政治動静（その１）」（1966年12月），「清末における在日康梁派の政治動静（その２）」（1967年12月），「光緒帝西太后の死去と在日康梁派」（1968年12月），「梁啓超と辛亥革命」（1975年３月），「丁巳復辟事件と梁啓超（その一）」1979年３月，「丁巳復辟事件と梁啓超（その二）」（1981年３月），「丁巳復辟事件と梁啓超（その三）」（1982年３月）などがある。

27　佐藤震二「梁啓超（一八七三～一九二九）」東京大学中国哲学研究室『中国の思想家』（下巻）勁草書房　1963年７月，792～793頁。

28　狭間直樹　編『共同研究　梁啓超　西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房　1999年11月。序文viii頁。

29　2004年１月にようやく岩波書店から日本語版の『梁啓超年譜長編』（丁文江・趙豊田編，島田虔次　編訳）第一巻（全部で五巻）が出版される。原書の出版時点より20年の歳月が掛かったとはいえ，日本の学界においても梁啓超研究の重みもついに本格的受け入れ始めた意義が大きい。『申報』民国十八年二月十九日に掲載した上海での梁啓超追悼場景の記事によれば，黄任之の弔詞には，彼が朝鮮に滞在したときに梁の書籍は入国禁止とされたことに言及し，日本政府は梁の文章が民族主義を煽るものであり，帝国主義には有害のものであると配慮したようだ。丁文江，趙豊田　編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社1983年８月　1208～1209頁。

30　溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会1989年６月　165頁。

31　拙稿「梁啓超の目録思想について―分類における虚実関係の変遷に関する考察」日本情報ディレクトリ学会誌　Volume 2, 2004。また，2003年10月に中国天津で開催された『梁啓超与中国近代社会文化国際研討会』において筆者の口頭発表に参照。

32　永井算巳「梁啓超と辛亥革命」『近代アジア教育史研究』（下巻）岩崎学術出版社1975年３月，234頁。永井氏の「梁啓超と辛亥革命」研究が教育史に収録されるのはいささか不自然なものであるとも思われる。

33　田村紀雄・陳立新　研究ノート「梁啓超と在日期の文筆活動」『コミュニケーション科学』（第20号）150頁。